



滑石地区について

滑石地区は、熊本県北西部の玉名市南西の有明海沿岸に位置している。地区の東端部には、阿蘇北外輪の西にある深葉山地を源とする菊池川が流れ、海へと注ぐ。

また、地区の沿岸部には、江戸時代以降に造成された広範な干潟地があり、農業が盛んに営まれている。

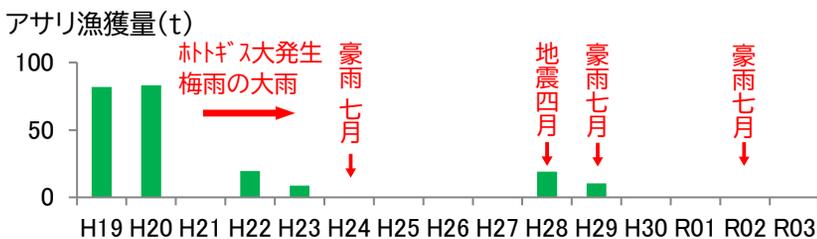


干潟の現況

当地区を流れる菊池川河口前面には広大な干潟が形成され、多種多様な生物が育まれている。また、その干潟を利用したノリ養殖やアサリ採貝業が盛んに営まれ、地区の基幹漁業となっている。

近年、地区の漁業を支えてきたアサリ資源が大きく減少した。また、ここ20年間では、平成21年以降のホトトギスガイの大量発生、また、その後の度重なる豪雨等の災害もあり、漁獲量が激減している。

干潟で育まれるアサリは、地区の漁業を支える資源であるとともに、多種多様な生物、また養殖するノリを育む干潟の生産力を向上させるための重要な資源の一つであり、その再生が喫緊の課題となっている。

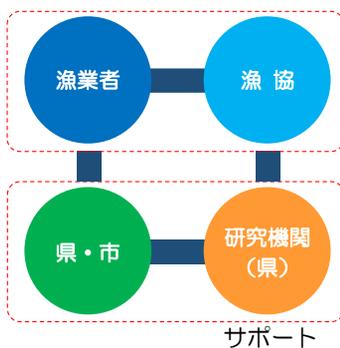


組織の設立および活動方針

上記課題の中、地区の漁業者が中心となり「滑石漁場保全活動組織」を平成25年度に設立し、アサリ資源の再生に向けた取組を開始した。

方針は、①干潟の機能劣化を防ぐ活動、②アサリ資源を回復させるための活動の両輪で資源の再生を図ることとした。当方針で活動を進めた結果、干潟環境が少しずつ改善され、アサリ稚貝も一定量出現するようになった。しかし、クロダイやカモ等の食害や砂の移動等による逸散で、その後の生残が悪く、その対策が求められている。

活動組織



● 活動方針

干潟の機能劣化を防ぐ活動	堆積する死殻の除去、ホトトギス対策を兼ねる耕うん、浮遊・堆積物の除去
アサリ資源の回復を図る活動	ナルトビエイ食害対策の囲い網の設置・メンテナンス、網袋による稚貝確保等

▶ 着底稚貝が出現するようになったが、生残できない。効果的な保護対策の検討が必要

アサリ資源回復に向けた活動の強化

(1) 着底稚貝の効果的な保護対策の検討

平成3年度、着底稚貝の効果的な保護対策を検討するために、県北広域本部水産課の指導員と一緒に、①広島県で開発された大野方式による稚貝保護（現地の稚貝を砂ごと網袋に入れて保護する方式）と、②西日本各地で普及している被覆網による保護対策の比較試験を実施した。

その結果、両手法ともに稚貝の保護に有効であることがわかった。ただし、大野方式においては、稚貝が死滅する網袋がみられたり、袋が流出したりと、設置場所や方法の改善が認められた。また、大野方式より被覆網の方でアサリの成長が早く、当干潟では被覆網を主体とした保護対策が有効であると考えられた。



(2) 被覆網の設置による稚貝保護対策の強化

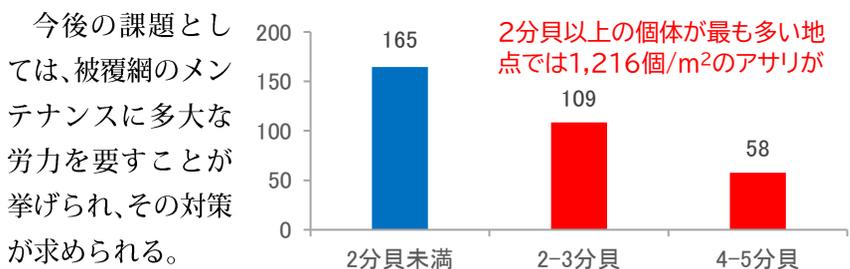
上記の検討を踏まえ、令和4年度から被覆網対策を本格実施することにした。設置する被覆網の大きさは4m×5mで、網目は9mm角である。設置方法は、当初、網の流失等防止を目的に網の上に土嚢を置いていたが、労力が極めて大きいことから、現在は、網の縁辺部に約2m間隔で鉄筋棒を打ち込み、その鉄筋と網をロープでピン張りするやり方に変更し、取組を進めている。現在設置している被覆網は、約800枚（約16千m²）であり、当取組を中心にアサリ資源の回復を図っている。



活動の成果と課題

設置した被覆網下に生息するアサリの平均密度は331個/m²であった。このうち、産卵群となる2分貝以上の平均密度は166個/m²であった。令和7年度における被覆網の設置面積は約16千m²であることから、母貝となるアサリが被覆網下で2.7百万個育まれていると推定され、これらによるアサリ資源の回復促進が期待される。また、毎年定期的に行われる熊本県水産研究センターの干潟全域の稚貝分布調査において、今年度、稚貝密度が過去最高となり、活動メンバーの意欲も高まっている。

被覆網内のサイズ別平均密度(個/m²;R6.4調査)



今後の課題としては、被覆網のメンテナンスに多大な労力を要することが挙げられ、その対策が求められる。